



自分のため、人のため、社会のために 何らかの命^{めい}を与えられて生きている

～命を生かして生きること “使命”を見つけて生きること～

3月11日(火)、第31回卒業証書授与式を挙行いたしました。今年度は、保護者、教職員だけでなく、ご来賓として市議会議員様と学校運営協議会の皆様、大津市教育委員会教育部長様をお迎えし、在校生代表として参列した2年生の生徒とともに175名の卒業生を送り出しました。校長式辞では、宮城県気仙沼市立階上(はかみ)中学校の卒業式の答辞を紹介し、一人一人が、その「命を生かして、生きること」、「“使命”を自分で見つけて生きること」、「命を生かして、命を輝かせて、あなたの人生を生きてください」と話しました。(以下、式辞の一部)

(前略)皆さんは、今日、3月11日が「いのちの日」であるということを知っていますか。この日は、東日本大震災で失われた多くの命を悼み、命の大切さ、災害の恐ろしさ、そして災害に備えることの大事さを学び、風化させないために制定された特別な一日です。

2011年3月11日に東日本大震災が発生してから、今年で14年。あの日、遠く離れたここ大津でも、(中略)体感できるほどの大きな揺れと、いつもとは違う怖さを実感したことを覚えています。

この大きな地震について、連日、報道が為される中で、私が忘れることができないのが、宮城県気仙沼市立階上(はかみ)中学校の卒業式です。本来なら震災の翌日、3月12日に行われるはずだった卒業式は、10日遅れの3月22日に、避難所になっていた体育館で行われたそうです。卒業生総数57名。その内、3名は震災の犠牲になっていました。この階上中学校の卒業生代表、梶原裕太さんが読み上げた答辞がテレビで放映されました。それが私の目に焼き付き、今も心に刻まれています。今日は皆さんに、その一部を抜粋して紹介します。同じ中学生として、あの時の彼らの心境を推し量りながら聴いてください。

『ちょうど10日前の3月12日、春を思わせる暖かな日でした。わたくしたちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い入れたこの学舎を、57名揃って巣立つはずでした。

前日の11日。一足早く渡された、思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に、思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名づけられる天変地異が起こるとも知らずに…。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていたわたくしたちでした。

しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、わたくしたちから大切なものを、容赦なく奪っていきました。

天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は、14時46分を指したままです。でも、時は確実に流れています。

生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには、大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていく事が、これからのわたくしたちの使命です。』

と、彼は学生服の袖で涙をぬぐい、声を詰まらせながらも必死で訴え、力強く読み上げていました。

最後は、『必ず、よき社会人になります』と、誓いを述べています。彼はその後、進学して土木工学を学び、現在は地元に戻って防災関連の企業で、地盤を改良する仕事に取り組んでいるそうです。

人生は一度きりで、自分の命は自分に与えられた「時間」とも言えます。その、一人ひとりの命は、誰でも等しく限りがあることは当たり前のことです。限りある命であるからこそ、尊厳があり、自他ともに、その命を大切にしなければなりません。

一人一人が、その「命を生かして、生きること」。先ほどの彼が言った「“使命”というものを自分で見つけて生きること」。これが、私が皆さんに大切にしてほしいことであり、伝えなかったことです。

“使命”とは、人が果たすべき役割や責任を指します。この言葉には、自分自身の存在理由や、他者に対する貢献が含まれています。自分のため、人のため、社会のために何らかの命(めい)を与えられて生きているのだということを心に留め、己の命を生かして、命を輝かせて、あなたの人生を生きてください。(後略)

「希望に燃え」・「理想に輝き」・「未来を拓く」学び舎

我が母校の「誇り」を胸に、仰木中校歌を大切に思い、しっかり歌う

愛校心♡仰木中愛



1,2年生 終業式・修了式

今日で、令和6年度の仰木中学校における授業がすべて終わりました。

3学期の終業式および令和6年度の修了式では、各学年の代表生徒に修了証を渡したあと、校長からは、『校歌』について、次のような話をしました。（以下、式辞の一部）

（前略）さて、先々週、3月11日は、仰木中学校の第31回目の卒業証書授与式でした。175名の先輩たちが、立派な姿で、この仰木中学校を巣立っていきました。厳かな雰囲気の中、式が始まり、最初に「国歌」を歌入りCDを流して歌った後、3年の生徒によるピアノ伴奏で、「校歌斉唱」ととなりました。

この校歌が、とにかく、大変素晴らしかった…。一瞬、「これも歌入りCDか??」と耳を疑ったくらい、今までで一番、最高の、心に響く、思いが心に届く歌声でした。自分の学校の校歌を、堂々と歌う2年生、3年生の姿と、その力強い歌声に、とても感動しました。一人一人の、仰木中学校の生徒であることへの「誇り」と「愛校心」が感じられ、大変うれしく思いました。

今日は、この「校歌」をキーワードに話をしたいと思います。そもそも、この「校歌」というもの、どこの学校にもあるのが当たり前と思っている人が多いかもしれませんが、実は、世界的には稀なことだそうです。日本特有のひとつの「文化」であると言ってもいいかもしれません。（中略）

仰木中学校の校歌の歴史はというと、開校した年である1994年（平成6年）12月にできあがり、初めて生徒や地域の方々に発表（披露）されたことが、記録に残っています。つまり、開校した年の新入生の入学式には、まだ校歌というものがなく、もちろん体育館の壁に飾られていることもなく、校歌のない、校歌を歌わない（歌えない）入学式だったわけです。仰木中学校は堅田中学校と分離してできた学校ですから、新2、3年生の生徒は堅田中学校の制服を着た仰木中生という状態です。この年の卒業式で初めて、校歌が壁に飾られた体育館で、式の中で校歌を歌うようになりました。

こうしてできた仰木中学校の校歌、1番から3番までの歌詞の中には、「希望に燃える」学び舎、「理想に輝く」学び舎、「未来を拓く」学び舎という言葉があります。

「学び舎」というのは、知識を得るだけでなく、友情や社会性を育む場としての側面も持っています。ですから、この「学び舎」は、生徒一人一人の人生の大切な拠り所であり、「希望に燃え」・「理想に輝き」・「未来を拓く」基盤となる場であるということを意味していて、それが仰木中学校なんだと言っているように思います。

「人が育ち、人が輝く」、そういう学校にしていくなだという思いが込められているのが、この校歌なのだと、私は考えます。作詞や作曲の方々はもちろん、それを歌ってきた先輩たちの「想い」を代々受け継ぎ、歌い紡いでいく…。それが「校歌」。代々、脈々と受け継がれてきた、たくさんの人々の「想い」が込められた「仰木中校歌」。我が母校の「誇り」を胸に、「仰木中校歌を大切に思い、しっかり歌う」。これも「愛校心」＝「仰木中愛」の一つです。（後略）

4月から新しく始まる令和7年度の中心となる1,2年生の皆さん。仰木中の先生方と、入学してくる1年生とともに、3年生から受け継いだ、母校仰木中学校の「誇り」を胸に、愛着を持って、「仰木中校歌」をしっかり歌っていきましょう。それができる学校にしていきたいと思います。

春休み中、自分も人も大切に、一日一日、目的をもって過ごしてください。

保護者・地域の皆様へ

1年間、本校の教育活動に、温かいご支援、ご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。学校夢づくりプロジェクトをはじめ、体験活動の折には、地域関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご協力いただき、子どもたちの学びを支えていただきました。新年度を迎えましてからも、変わらずご支援いただけますよう、お願い申し上げます。

